

Report: Special Seminar on Slovenia

Anna Pak

On the 27th of October, we had a chance to listen to the lecture given by the Professor of Tokyo University of Foreign Languages (TUFS) Jelisava Sethna, and had pleasure to hear the comments from another Professor from TUFS, Shinji Yamamoto sensei.

The lecture of Prof. Sethna consisted of three parts:

The first part was an introductory part, where we got to know such things as basic statistics data, geography, political and economics systems, what to see in Slovenia and even what we should try from the national dishes of Slovenia (so do not miss such things as potica, kislja zelje, pecenice, zganci etc.).

The second lecture was mainly about the history of Slovenia: from the first Slovene state-Carinthia till the times when Slovenia became independent in 1991 and present situation as a part of the European Union (EU).

The third lecture was the most interesting, but also the most confusing one, because we were learning some Slovene language. It was very enjoyable though. We learnt how to write our own names using the Slovene alphabet, how to communicate in a restaurant, greet each other and some other useful phrases.

We also received an omiyage (souvenir) from Sethna sensei, who gave us the publishing of the symposium of Slovene language and Culture, where we can obtain more knowledge about different researches of Slovenia.

After the tea-break, we had the presentations part, where all the participants had to make presentations on the topics.

In my opinion, all the presentations went smooth, and we received very useful comments not only from both TUFS's professors, but also Professor Aoki sensei and Sawada sensei, who also attended the seminar.

Overall, regarding the presentations, the only negative comment which was given during the presentations was the trouble with eye-contact because of the presenters looking at the script most of the time.

To conclude, it was a very interesting lecture and it was a great pleasure for us to see Professor Sethna and Professor Yamamoto from TUFS, Professor Aoki and Sawada sensei.

Also, special thanks to our English adviser Vivian sensei for all her time, efforts and dedication; Tobe san for all his assistance and taking care of all us.

スロヴェニア集中講義

セクション :

人口や地理についての説明がありました。人口は約 2,053,800 人。面積は四国と同じくらい。オーストリア、ハンガリー、クロアチア、イタリアと国境を接し、北はアルプス山脈、南は地中海に接した非常に恵まれた地理条件にあります。ブレッド湖やポストイナ鍾乳洞が観光スポットとしては有名です。リュブリャナ市内のリュブリャナ城や教会が写真によって紹介されました。郊外は自然に恵まれています。山、ワイン用の葡萄畑、修道院らが紹介されました。また、伝統建築として、干し草を作るための小屋の紹介、伝統工芸として養蜂のための箱に描かれた絵画（蜂はこの絵画の模様を認知して度の巣へ戻ったらいいか判断するそうです）が紹介されました。野生の動物もたくさん存在します。仔馬の時は黒くて成長すると真っ白になる固有の馬がブリードされています。また、スポーツが盛んでバスケの強豪として有名で、スキージャンプの発祥の地でもあります。

質問時間が設けられました。私は食べ物についておすすめを尋ねました。以下はその一覧です。

žganci そば粉を用いた食べ物。krvavice ブラッド (blood) ソーセージ。pecénice ポークソーセージ。ricēt 大麦を用いたスープ。

デザート : Potica 最も伝統的なロールケーキ。Gibanica 層になったケーキ。Palačinke パンケーキ。

飲み物 : kava コーヒー。čaj お茶。vino ワイン belo 白、rdeče 赤。

セクション :

第 2 セクションではスロヴェニアの歴史の簡単な概略が紹介された。

リュブリャナは伝説では、ギリシャ神話の英雄イアソン王子によって建設されたといわれる。

スロヴェニアは紀元前にはギリシャの植民都市の一つだった。六世紀にはスラヴ系民族が入植し始める。七世紀頃には完全に平等な民主主義システムによって共同体が支えられていた。八世紀になるとフランク王国の支配下に、十世紀にはオットー一世によってスロヴェニア人の住む地域が一つの公国として認められるようになった。この頃からキリスト教化が始まる。十三世紀にはハプスブルグ家の支配下に属することになった。十八世紀にはハプスブルグ家の啓蒙専制君主マリア・テレジアの下、中央集権化が進み、共同統治をおこなった。十九世紀初頭にはナポレオンによってハプスブルグ家から解放、フランスへ併合、

この時、州都はリュブリャナに置かれることとなった。一九一八年セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人による王国が建設される。一九四一進行してきたイタリア・ドイツ・ハンガリーによって三分割される。一九四五年、ユーゴスラヴィア連邦人民共和国が結成される。一九八九年ベルリンの壁崩壊。一九九一年、スロヴェニア共和国の誕生。

セクション :

スロヴェニア語についての簡単なレクチャーがおこなわれました。最後に、スロヴェニア語で表現したい言葉はないか参加者が尋ねられました。いかがその一覧です。

Ja (やー) はい。ne (ネー) いいえ。Doberdan (ドベダン) 挨拶の言葉。

Kako si? (カコジ) How are you? Žiujo? (ジウヨ) 友達同士の挨拶。Hvala, dobro (フバラ ドブロ) 元気です。Fine. Adijo(アディオ) さよなら。Na svidenje (ナ スヴィデニエ) See you again. Hvala za pozornost ご清聴ありがとうございます。A lahlo dobin ~ (アラフロ ドピン) ~ ください。Rad bi ~ veste WC koliko stane? Na zdravje

セクション :

発表&コメント

10分間の発表を四人の参加者がそれぞれ行い、コメントをいただきました

私の発表に関しては、パワーポイントや英語の表記に関するテクニカルな問題が指摘されました。また、パワーポイントを用いるさいの文字と背景とのコントラストが聴衆にとって見やすいものか否かの問題が指摘されました。

反省:

今回は、外賓の講師を招いてのセッションに関してどのように場をセッティングしたらいいのかに関して、問題がありました。プレゼンテーターはスクリーンの近くに席を置くのが通常の在り方であったのですが、そうしたセッティングが今回できていなかったことが反省点です。

日時：2009年9月27日（日）、13:00～18:00

場所：筑波大学 共同利用棟 A102

大要：2009年10月20日～21日にかけてスロベニアの首都リュブリャナにて開催される第二回日本スロベニア学生会議に先立ち、会議参加者を対象としたスロベニアに関するセミナー。特別講義及び学生会議参加者による研究報告の二つから構成される。

13:00～16:20

➤ 特別講義：Prof. Jelisava Sethna (Tokyo University of Foreign Studies)

“An Introduction to the Culture, History and Language of Slovenia”

【前半】社会編、【後半】歴史編

当日は、東京外国語大学で教鞭をとられる Jelisava Sethna 先生によるスロベニアに関する講義から始まった。講義は、基本的にパワーポイントを用いながらスロベニアに関する大まかな情報を提供するものであり、前半はスロベニアの社会や文化にかかわること、後半は主に歴史を中心に扱いながら進められた。とりわけ興味深いのは、やはり個人的な関心とも通ずるが冷戦構造の崩壊とそれに伴うソ連邦からの独立（1991年6月25日）、及び統合の「拡大と深化」を進める欧州連合（EU）への加盟である（加盟は2004年5月1日）。前半及び後半部終了時には、それぞれフロアとの質疑応答の時間が設けられた。スロベニアの政治体制について質問する者（Prime Minister と President はどちらが権力を有しているのか）から「おススメのお酒」を質問する者まで広範囲に渡って質疑応答は行われた。私は、前半終了後の質疑応答で、その内容とは全く関わりのないことを断りつつ、スロベニアの EU 加盟に先立つ 2003 年に行われた EU 加盟を問う国民投票に関する質問をした。それは、「EU に加盟するためには EU が定める多くの規制を受け入れなければならない、スロベニアは政治経済分野にかかわるさまざまな基準を満たすため自発的に努力してきたにもかかわらず、なぜ 2003 年の国民投票における投票率は 60% 台であったのか（80% を超える賛成を得て加盟）」というものである（無論、この傾向はスロベニアだけではなく多くの東欧諸国に見られるものであるが）。この問いに対しては、「EU 加盟は自明の（self-evident）ことであったため、投票率が上がらなかった」、「60% は、通常選挙等の投票率と大差なく取り立てて低いというわけではない」という二点が示された。果たして、EU 加盟は「自明」のことであったのであろうか。

全体を通して、会場は和やかなムードであった。講義の最後には、簡単なスロベニア語を学びスロベニアに対するイメージを膨らませた。

16:20～16:40

➤ 休憩

16:40～18:20

➤ 学生会議参加者による研究報告

スケジュールよりも約 1 時間半の遅れで学生会議参加予定者による研究報告が行われた。松本秀昭（筑波大学）、野田茂恵（東京外国語大学）、Anna Pak（筑波大学）、高橋美野梨（筑波大学）の順番で行われたが、参加予定者の 4 名が欠席であったことから当初の予定では一人 5 分程度に短縮して行われるはずであった報告は、結果として 10 分のフルバージョンで行われた。松本秀昭氏の報告タイトルは、“Nationalism: Berlin and the Importance of Herder”である。野田茂恵氏の報告タイトルは、“Crisis of Identity: Study of Tarchetti's works with considerations of the Doppelganger motif”である。Anna Pak 氏の報告タイトルは、“The Soft Power as one of the motives of Japan's Foreign Aid Policy towards Uzbekistan”である。高橋美野梨は、“Whaling, a Battleground: 'EU as a Regulatory Empire' and Denmark/Greenland”である。私は、EU の「規制帝國的影響力」を捕鯨問題の事例を通じて報告したが、特に、規制帝国が帝国としての影響力を行使する際、あくまでも規制を受ける側が自発的にそれを受け入れることを前提としている、という規制帝国が有する「帝国性」を規定する特徴の一つをどの程度フロアに伝えることができたのか、少し不安がある。報告時間 10 分の中で捕鯨問題と絡ませながら EU の「規制帝國的影響力」を説明していくことは容易ではなかった。

各報告終了後には、フロアからいくつかのコメントを受ける形で質疑応答が行われた。